

灘五郷・鉄筋コンクリート造酒造工場の建築史 — 四季醸造庫の誕生

text : 川島 智生

●▲■ 1 鉄筋コンクリート造酒蔵の意味

酒蔵の建築形態を考えると、戦前戦後には大きな断絶がある。灘五郷の酒蔵は空襲で 70% の酒蔵が焼失し、大きく変容する。空襲を受ける直前には 290 庫があったが、空襲で 217 庫を焼失し、残った酒蔵は 73 庫だけとなる。昭和 20 年代前半は木造による応急の復旧、昭和 20 年代後半からは鉄筋コンクリート造が許され、鉄筋コンクリート造による工場化が進展する。

鉄筋コンクリート造は高層化が可能ゆえに、その結果、同一の建坪で造石高は数倍となる。昭和 30 年代後半から 40 年代には鉄筋コンクリート造による四季醸造庫が建設され、四季醸造ではない鉄筋コンクリート造にくらべ造石高はおよそ三倍となり、従来の土蔵酒蔵とくらべると 10 倍以上に生産性はあがる。したがって、灘五郷では伝統的な土蔵酒蔵に回帰することはなかった。

鉄筋コンクリート造だからこそ、明治期より酒造家が夢見た四季醸造庫が作り得た。土蔵と違い、密閉度が高いために、冷房を効かすことによって、建物のなかを人工的に冬にすることができた。

ちなみに従来の土蔵造りは昭和 25(1950)年に制定される建築基準法で大きく制限され、昭和 34(1959)年の「木造建築禁止令」によって、事実上建設は閉ざされる。地方の酒蔵にも昭和 30 年代から鉄筋コンクリート造化が進展するのはこのような法的な縛りがあったことが関連する。

いま灘五郷の近現代史を振り返ってみると、灘五郷の酒造家がかつても勢いがあったのは鉄筋コンクリート造によって復興した 1960 年代だったといえるのではないかと。灘五郷で鉄筋コンクリート造化が進展した理由は空襲で多くの土蔵酒蔵を焼かれたことを主因とするが、きわめて生産性の高いこの新しい建築構造によって、灘五郷はふたたび高度経済成長期に全国の酒造会社をリードすることとなる。この頃には大手の酒造メーカーを中心に鉄筋コンクリート造の四季醸造庫が完成する。

そのあと、半世紀以上もその構図は続くが、2000 年以降からは清酒がこれまでのようには売れなくなる。それ以来すでに四半世紀が経過した現在、大量生産を目的とする酒造工場の存続維持は困難になっている。2021 年の西宮の白鹿の戎蔵解体に続き、本年 2026 年に御影の白鶴二号蔵の解体が予定されている。このような現状からは、戦後に建設された四季醸造庫も今後は次々と解体の方向に向かうものと予測される。このことはこれまでの生産システムのひとつのおわりを意味し、今後は少量生産のなかでクオリティが高いものになっていくのだろう。小規模の酒蔵ではそれが可能だが、大量生産を主軸としていた灘五郷の酒造メーカーはいかなる方向に向かうのか。近現代の鉄筋コンクリート造酒蔵の建築史を探り、検証することで、その予見に繋げたい。

●▲■ 2 戦前期までの全国各地の鉄筋コンクリート造酒蔵

戦後に急増する鉄筋コンクリート造酒造工場をみる前に、戦前期までに出来た鉄筋コンクリート造酒蔵を俯瞰してみる。

建設年順に挙げると、広島県呉の三宅本店の大正庫(1923年・解体済)を嚆矢として、埼玉県春日部の田中酒造(1924年・解体済)、京都伏見の共同酒造(現・月桂冠)の昭和蔵(1927年・現役稼働)、小樽の野口酒造の四季醸造庫(最後は雪の花酒造・1929年・解体済)、秋田の那波商店(1929年・現役稼働)、白鷹の北店蔵(1929年・現役稼働)、旭川の小檜山酒造(現高砂酒造)(1929年・現役稼働)、伏見の藤井酒造(1929年・現役稼働)、西宮の白鹿の白鹿館(1930年・解体済)、伏見の金鶏正宗のみどり蔵(1930年・解体済)、奈良県吉野の北岡本店(1930年・現役稼働)、愛知県の浅井酒造(1933年・解体済)、八戸の八戸酒類八鶴工場(竣工年不明・現役稼働)、の 13 蔵が見出せている。

これらの酒蔵のうち、冷房装置を設け、四季醸造が試みられたのは三宅本店・共同酒造・野口酒造・白鹿館・金鶏正宗の 5 蔵であり、それ以外の 8 蔵は四季醸造がめざされていない。いとも容易く中高層の立体建築が可能な鉄筋コンクリート造は、敷地の有効利用が図れることで採用されたが、同時に土蔵造りの酒蔵が見舞われることの多かった火災に耐える耐火構造が買われたことが大きかった。鉄筋コンクリート造のもつ耐震や半永久という特質はこの時期ではそれほど重視されていない。

筆者は 1991 年から 2012 年までの間に戦前期鉄筋コンクリート造酒蔵の現地調査を実施したが、それ以前に田中酒造と浅井酒造の 2 蔵はすでに消滅していた。一方、現在はない大正庫をはじめ、野口酒造、白鹿館、みどり蔵の酒蔵は現役稼働しており、蔵内部の調査が実施できた。

灘五郷に限って言えば、白鷹の北店蔵と白鹿館の二蔵だけであった。ここからわかることは戦前までではけっして灘五郷が先行していたわけではなく、偏りはあったが全国各地に生まれており、生産量や蔵数を考えると、むしろ灘五郷は遅れていたともいえる。

では鉄筋コンクリート造にした理由のひとつ、四季醸造庫の試みはどのような結果だったのか。どの酒蔵も十分に満足いく清酒がつかれなかった。そのためほとんどの酒蔵ではここで仕込をおこなうのではなく、冷房蔵を貯酒用に使ったにとどまる。

鉄筋コンクリート造による酒蔵はこれまでの木造酒蔵とは異なり、立体化するなか二階もしくは三階建てになることが多く、その高さを利用した重力落下式の醸造法がおこなわれる。つまり、処理された原料を階上に上げ、酒造操作の進むに従って階上から漸次に階下へ、原料が製品化して降りて来るといったものだった。

鉄筋コンクリート造酒蔵に現われた建築スタイルをみると、大半のものは実用建築にふさわしく、コンクリートの柱型と梁型が外壁に露出した簡素な外観を示した。装飾的側面としては、歴史様式の



図1 白鷹・北店蔵の外観 (川島智生撮影)

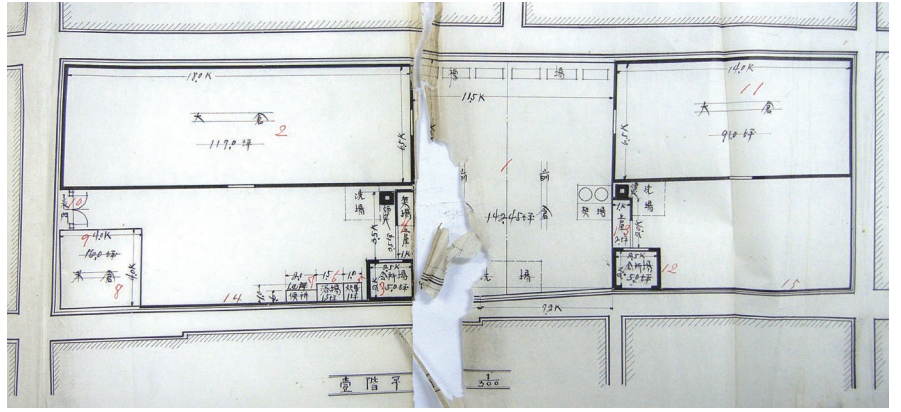


図2 白鷹・北店蔵と大北蔵の1階平面図兼配置図

残滓や「セセッション」(19世紀末にドイツ・オーストリアで興った建築・工芸の革新運動)に影響を受けたディテールなどが見られるものもあった。

●▲■ 3 戦前期・灘五郷における鉄筋コンクリート造酒蔵

3-1 白鷹の酒造庫

灘五郷の鉄筋コンクリート造酒造工場の出発点は昭和5(1930)年の白鹿館がよく知られるが、前年の昭和4(1929)年に白鷹の酒造庫で鉄筋コンクリート造による酒造庫が完成していた。灘五郷では最初のものである。この酒蔵の1棟は現存する。

この蔵は北側が大北蔵、南側は北店蔵と呼称され、その間に前蔵があり、現在もその半分の北店蔵は現存し、瓶詰場として使われている。この蔵と左右対称に逆転したプランをもつ大北蔵も阪神淡路大震災までは残っていた。北店蔵とはセミ・デタッチド・ハウスのような左右対称に接合するプランであった。二階建てとなり、階ごとにそれぞれ2蔵、計4つの仕込蔵からなった。ここでの蔵の大きさは梁間6.5間×桁行18間となり、灘五郷に多かった千石蔵の大きさ(梁間6間×桁行16間)をほぼ踏襲するものであった。明治中後期に西宮や御影、魚崎で成立する長屋型の酒蔵の手法を鉄筋コンクリート造に置き換え、立体化したものであった。

ここでは四季醸造のための冷房装置や重力落下の生産システムは採られなかった。では鉄筋コンクリート造化の理由はどこにあったのか。ひとつは階数を2層にし、それぞれ人工地盤ともいえる鉄筋コンクリート造スラブの前蔵を設けることで、面積あたり蔵の数を2倍とし、生産性の倍増が目論まれたのだろう。もうひとつの理由は耐火であり、火事で燃えることのない鉄筋コンクリート造が選ば

れた。灘五郷は明治・大正期には地震に遭遇しておらず、最大の悲劇が火災による焼失であった。

この酒造庫は西側立面では柱と梁からなる骨組みを外壁面にあらわす手法を採るが、その換気用の小窓にはひとつずつ庇が付けられており、日本の気候を考えたつくりになっている。東側立面をみると、杜氏や蔵人が寝泊まりする会所場が前蔵の手前に鉄筋コンクリート造の独立建築で設けられていた。3階建てが2棟あり、計6室となる。大きさは5坪であった。その居室窓の楣だけは各階ともに煉瓦貼りになっており、西洋歴史様式の残滓が表現されていた。設計者ならびに施工者は不詳である。

3-2 白鹿館

白鹿館は冷凍装置附新式酒造工場として建設された。この酒造場は剛接アーチの大空間となった瓶詰場を併設したもので、中心に一際高い塔屋があり、一旦ここに米と水を上げ、後は重力落下によって下階に行けば酒造の工程が進むという空間構成になっていた。その塔屋には二つのエレベーターが配され、それを軸とし、左右対称の平面プランとなる。一階の冷凍蔵、前蔵、二階の冷凍蔵、米洗浄、そして同じように露台が設けられ、左右の外部階段をのぼると屋上でつながるという仕掛けになっていた。

白鹿館は竹中工務店の設計施工であって、設計担当者は石川純一郎という朝日新聞社大阪本社を設計したモダンデザインの名手だった。この酒造場では水平線を意図的に強調する意匠が展開され、外観の美についても配慮がなされたもので、酒蔵としてはもっともモダニズムを代表する建築であった。白鹿館は2011年に解体された。

瓶詰場などの鉄筋コンクリート造化はこの時期、菊正宗や白鶴、石崎酒造(現、沢の鶴)などで確認される。



図3 白鹿館 1930年

●▲■ 4 1950年代の鉄筋コンクリート造酒造工場

建築基準法が発令された昭和25(1950)年に鉄筋コンクリート造建物の建設が再開される。酒蔵では灘五郷の菊正宗の嘉宝蔵二番蔵と三番蔵が最初のもので、同年に完成する。以降1950年代には灘五郷各地で鉄筋コンクリート造の酒蔵が建設されるが、7階建ての白鶴二号蔵を除いては、すべて2～4階の低層の建物で、冷房装置は付けられていない。

竣工順に列挙すれば、昭和25年に菊正宗の嘉宝蔵二番蔵・三番蔵、昭和27年に白鶴二号蔵、昭和28年に菊正宗の嘉宝蔵四番蔵、大関の恒和蔵、白雪の今津壽蔵、昭和32年に富久娘(花木酒造)本社工場、昭和33年に菊正宗嘉宝蔵五番蔵、昭和35年に白鷹三号蔵、大関壽蔵、多間の玄德庫、豊沢酒造の御影蔵、百万両酒造の和館蔵、昭和36年に富久娘(花木酒造)新蔵、の14蔵となる。このうち二階建てのものは恒和蔵、玄德庫、御影蔵の3蔵であり、あとの11蔵は三階建て以上のものとなる。なお白鷹三号蔵(昭和35年)と大関壽蔵(昭和35年)は建設当初は四季醸造庫ではなかったが、ともに数年後には冷凍機械室を設置し、四季醸造庫となる。

鉄筋コンクリート造化が灘五郷で進展した理由は空襲で焼失したことによるが、とりわけ被害が激しかった御影郷の菊正宗と白鶴が鉄筋コンクリート造酒造工場の建設では先行する。今津郷も同様な状況を呈し、大関と小西酒造で建設が相次ぐ。この4社は昭和20年代に鉄筋コンクリート造酒造工場を完成させていた。



図4 菊正宗・嘉宝蔵二番・三番蔵 1950年(川島智生撮影)

菊正宗からみる。昭和二十年代のわが国清酒醸造の「モデルファクトリー」としてしられた嘉宝蔵二番蔵と三番蔵は両蔵を隔てる境界壁を軸に左右対称になった一体化された建物であり、まったく各室は同一の配置ならびに内容になっている。そのような意味では昭和4年に完成した白鷹の2蔵一体化した酒造庫と共通するが、規模が大きく、酒造は2階でおこなわれるようになっていた。竣工時の説明書によると、「耐震耐火の近代的堅牢建築で、設備は近代科学の粋を集め、装備の麗と共に他の追随を許さぬ実に模範的醸造工場で、其の醸造能力は正に七千石以上」とあった。



図5 白鶴二号蔵 1952年(川島智生撮影)

菊正宗ではその3年後の昭和28(1953)年には嘉宝蔵四番蔵、昭和33(1958)年には嘉宝蔵五番蔵と、計4つの蔵がわずか8年間に完成する。未曾有の建設ラッシュであった。その生産体制は昭和40(1965)年に完成の四季醸造・菊栄蔵で完結する。設計はいずれもが大林組設計部であり、嘉宝蔵五番蔵からは著名な建築家の渡辺節が設計を担う。

1950年代の鉄筋コンクリート造酒蔵のなかで特筆すべきは、昭和27(1952)年に竣工の白鶴二号蔵で、7階建が出現する。わが国最初の高層建築の酒蔵であり、酒蔵の形状を逸し、あきらかに近代的な工場の形態となる。酒造工場の誕生である。設計は竹中工務店である。

戦前までの酒造工場は、白いコンクリートの壁をみせても、形態としては水平に長く、あくまでも木造酒蔵の延長線上に位置した。ところが、である。戦後になると、縦に立ち上がり急速にビルディング化する。「酒造ビル」との呼称も生まれる。米と水を最初に最上階に上げて、そこから下階に下がるにつれて酒が出来るという重力落下の製造システムが確立されたからだ。当然外観にデザインが施されるケースは少なく、勢い機能面を重視した形態となる。一般的に窓が極端に少なく、柱型が外壁側に表出するタイプが多い。白鶴二号蔵で誕生したこの形態は昭和36(1961)年完成の月桂冠の

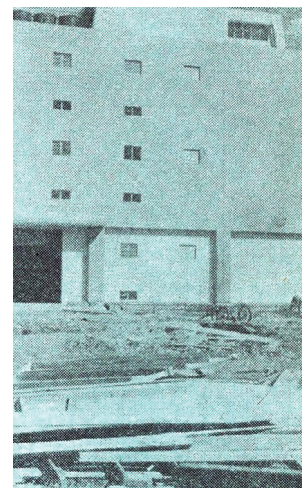


図6 花木酒造 1961年

四季醸造庫・大手蔵に影響を与えたと、筆者は考えている。

富久娘（花木酒造）新蔵は現存しないが、1階のピロティ、屋上階の台形の外壁など、フランスの建築家コルビュジェの影響を彷彿させる。大阪の尾崎建築事務所の設計であった。鉄筋コンクリート造酒造工場としてはもっともデザインにこだわった建築といえる。

●▲■ 5 1960年代の四季醸造庫

四季醸造庫は灘五郷の酒蔵ではなく、伏見の月桂冠（旧大倉恒吉商店）が最初に成功させた。昭和36（1961）年に完成の大手蔵である。大倉恒吉商店の関連会社の共同酒造は昭和2（1927）年に冷房付きの鉄筋コンクリート造の昭和蔵を完成させており、同社は早い時期から四季醸造に取り組んでいたが、うまくいかず、34年後の昭和36年の大手蔵でようやく商業的に成功する。この間に新たな空調技術の導入によって、温度湿度管理が格段に向上し、また蒸米機・製麹機・圧搾機・火入れ機など全過程の自動化に成功して、「従来の酒づくりの観念をすっかり打ち破ったオートメ式四季醸造工場」が生まれた。

灘五郷でもこの成功に触発されて、翌昭和37（1962）年以降に次々と大手メーカーを中心に四季醸造庫が建設される。

判明した灘五郷の四季醸造庫を竣工順に列挙する。昭和37年に沢の鶴の西蔵を嚆矢に、昭和38年に金盃酒造、日本盛本蔵七番、白鶴本店三号工場、昭和39年に白鹿戎蔵、昭和40年に富貴（合同酒精）西宮灘工場、菊正宗菊栄蔵、昭和43年に富久娘酒造の富源蔵、昭和46年に沢の鶴の瑞宝蔵と続く。多間酒造の七福蔵の建設年は確認できないが、四季醸造庫であった。建設年は不明だが、忠勇の若林酒造も四季醸造庫を建設していたものとおもわれる。ここからは昭和36年までは灘五郷に四季醸造庫はなく、昭和37年以降は四季醸造庫が誕生するということがわかる。

ちなみに『続灘酒』（1988）によれば、灘における非木造の三階建て以上の高層階機械化工場は昭和59（1984）年の時点で、上記の10庫を除いて、9庫あり、計19庫からなる。

なぜ1960年以降には四季醸造庫が本格化するのだろうか。国税庁醸造試験所所長の鈴木明治は『日本醸造協会雑誌』（昭和36年10月号）で、四季醸造庫の有利な点を工場の規模がきわめて



図8 菊栄蔵 1965年

コンパクトになる点と酒の品質の均質化が可能となる点の、2点を指摘していた。その背景には高度経済成長を受けて需要が急増し、昭和34年以来、清酒は前年度の石高に比較して、生産量が毎年10%を超える状態が続く。そのことに応えるために、生産量が一挙に3～4倍になる四季醸造庫が求められたわけだ。

四季醸造庫の建築スタイルに触れておくと、外観的にはこだわったスタイルのものは少なく、渡邊節が設計した菊栄蔵が唯一、工場という実用建築ではあるが、ある種のデザインの試みがなされていた。それは中央に塔屋と即物的な外部階段を設け、左右対称性を強調し、最上階では連続窓がスパン間を飾る。外壁は柱型と梁型を外部に表出するフォルムが採られ、柱型と柱型の間に縦樋がこれみよがしに配される。

●▲■ まとめ

3回にわたったこの連載では、江戸時代の文化・文政期（1804～1830年）に完成した千石蔵から明治大正昭和をとおして1960年代までの、およそ百五十年間の灘五郷の酒蔵を建築史の観点から俯瞰した。土蔵造りからはじまり、明治期は煉瓦造、昭和に入ると鉄筋コンクリート造が生まれ、戦後は四季醸造とも関連し、大手酒造会社を中心に鉄筋コンクリート造による高層ビルディング化が進行し、現在に至る流れを解説した。

(Text. T. Kawashima)



図7 金盃四季醸造庫 1963年

川島 智生（かわしま ともお）

1957年 広島県 鞆町生まれ

1998年 「学校建築史」で博士号（京都工芸繊維大学：PhD）

建築史家、一級建築士、前・京都華頂大学教授

神戸情報大学院大学・客員教授、大手前大学・客員研究員

著作：『近代京都における小学校建築』『近代神戸の小学校建築史』

『近代日本のビール醸造史と産業遺産』など多数

月刊誌「醸界春秋」（※）に、34年間にわたって『醸造家と建築』

を191回連載（※2025年9月号で廃刊）

QA? 本稿に関するご質問・ご意見等は、きた産業 info@kitasangyo.com にご連絡ください。筆者に転送いたします。